

公民学まちづくり拠点のプログラム評価手法の開発と適用に関する研究 ～松山アーバンデザインセンターにおけるロジックモデル作成事例～

愛媛大学 学生会員 ○志田尚人 愛媛大学 正会員 羽鳥剛史
松山アーバンデザインセンター 正会員 尾崎信 豊橋技術科学大学 正会員 小野悠
愛媛大学 正会員 片岡由香 愛媛大学 非会員 小川直史

1. 公民学連携のまちづくりと松山アーバンデザインセンター

近年、まちづくりにおける課題が多様化、複雑化する中、多様な関係主体の協力によってまちづくりに取り組むことが求められており、専門知識を活かしながら関係主体間の調整を図る組織として、「アーバンデザインセンター」の役割が期待されている。愛媛県松山市では、平成 26 年 4 月に「松山アーバンデザインセンター（以下、UDCM）」を発足し、松山市の都市空間デザインマネジメント、都市境界の賑わい創出に向けた調査・研究・ワークショップの開催、松山市のアーバンデザインの高度化を図るための研究会、松山市や民間事業者が行う松山駅や道後温泉周辺における景観整備の支援等の活動を行なっている。また、市民がまちづくりの知識やノウハウを学ぶ「アーバンデザインスクール」の運営や、テレビ・新聞・SNS による市民へ向けたまちづくり活動の情報発信等を行なっている。

アーバンデザインセンターをはじめとするまちづくり拠点は、ともすると多岐にわたる活動を場当たりに実施する場合も少なくなく、そうしたまちづくり活動がどの様に都市や地域の課題解決に貢献しているかについて評価する試みは十分になされていない。また、まちづくり組織の活動を体系的に評価するフレームワークが十分に確立していないのが現状であり、そのため「事業改善ができない」「必要な活動の不実施・不必要な活動の実施」等の問題が懸念される。そこで本研究では、行政分野の評価に用いられる「ロジックモデル」に着目し、UDCM の活動のロジックモデルを作成すると共に、UDCM の活動評価への適用可能性について検討する。

2. 政策評価とロジックモデル

ロジックモデルは、プログラムの実施に関して、施策・事業の対象にどのように影響を及ぼし、最終的にどのような効果を挙げていくのかについて、活動の一連の関連性を「インプット（投入資源・活動）」「アウトプット（結果）」「中間アウトカム（成果）」「最終アウトカム（長期的な成果・目標）」で表し、それらを「リンク」でつなぎ図式化したものである。ロジックモデルにより、必要な活動の絞込み、活動実施過程の改善、市民への説明責任の遂行等が期待できる。

3. 松山アーバンデザインセンターロジックモデル作成

UDCM ロジックモデルは、①既存プログラム内容・理論の把握、②ロジックモデルの原案作成、③内容の精緻化の手順で作成した。都市計画を専門とする教員 1 名と大学院生 1 名、UDCM スタッフで協議を重ね、ロジックモデル（図 1）を作成した。

ロジックモデル作成により、UDCM が関与する 22 の事業は 8 分野に分類され、それらは 3 つの最終アウトカムに結びつくことが示された。

多くの活動がまちづくりにどう活かされているか把握できないという問題に対しては、ロジックを整理することで視覚

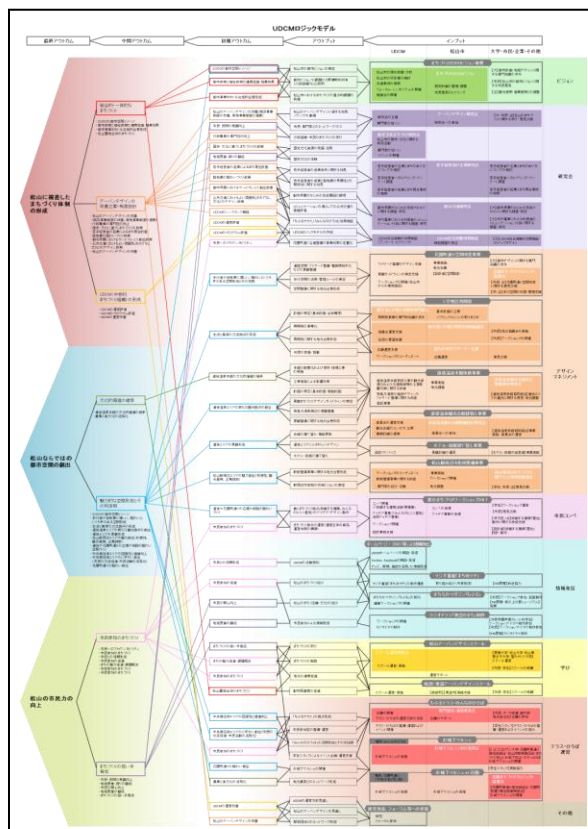


図 1 UDCM ロジックモデル

的に把握可能となった。また、インプットにおける活動を、事業に関与する組織別で示したことで、事業に対する組織の役割が明確化された。

4. 松山アーバンデザインセンターの事業評価へのロジックモデルの適用

ロジックモデルを UDCM のようなまちづくり中間組織のプログラム評価に適用するための評価手法の開発と、評価手法としてロジックモデルを活用することでどのような知見が得られるのかを検討する目的で、ヒアリング調査を行った。対象者は、UDCM シニアディレクター、UDCM 客員研究員、大学教員、松山市 UDCM 担当課職員 2 組の計 5 組である。

ヒアリング対象者には事前に資料としてロジックモデル詳細版を配布し、「リンクの評価」「項目の追加・削除」「担うべき組織の変更」の作業を行ってもらった。ヒアリングでは、事前作業での内容をもとに、UDCM 事業の内容の偏り、リンク・ロジックの方向性、組織間の連携等に関する意見を尋ねた。

ヒアリングを通して、「UDCM として重視すべき事業」「他の組織が担うべき事業」の評価や意見が得られた。「UDCM として重視すべき事業」に関して、『長期的なまちづくりを見据えて「まちづくり 2050 ビジョン事業」をはじめとした総合的・一体的なまちづくりを重視すべき』『まちづくりの人材の高齢化が懸念されるため、担い手育成や市民参加促進のための「情報発信」「学び」を重視すべき』といった意見が得られた。また、「他の組織が担うべき事業」に関して、『「アーバンデザインスクール」の運営は UDCM の負担が大きい。民間・NPO・その他組織に一部活動を委託すべき』『UDCM は、「市民コンペ」「情報発信」「テラス・ひろば運営」を担える新たな主体を作るサポートをし、その主体が運営していくべき』といった意見が得られた。これらの意見は、UDCM が取り組む事業のすべての分野を視覚的に把握できるからこそ得られたものだと考えられる。『総合的・一体的なまちづくりを重視すべき』という意見は、情報発信や市民参加のワークショップといった「市民力の向上」に UDCM 活動の比重が置かれている現状がロジックモデルによって把握され、3 つの最終アウトカムのバランスをとるためには重要、という背景があって得られたものである。また、『他の組織に活動を委託すべき』という意見も、アウトカムに対して情報発信の活動が過剰になっており、UDCM の負担が大きいと把握できたために得られたものである。

その他にも、各事業の組織ごとの活動を示したことで、組織間の連携に関する意見が得られた。また、項目・リンクの不足が明確になることで、新たな方向性の検討や活動の提案も出された。

5. まとめ

UDCM の事業評価にロジックモデルを用いることで、「機能している・機能していない事業」「UDCM として重視すべき・重視すべきでない事業」「担うべき組織の変更」「項目・リンクの追加・削除」「インプットの連携」「まちづくりの新たな方向性・活動の提案」等に関する意見が得られることがわかり、UDCM のあり方の議論や事業改善に貢献できることが示唆された。

ロジックモデル活用の目的の 1 つである「対象者への説明責任の遂行」のために、今後はロジックモデルの市民や行政に対する公表が課題となる。また、本研究では事前評価作業とヒアリングによる事業評価を行ったが、評価基準やヒアリング手順に関して改善すべきという意見もあり、まちづくり拠点の評価手法の確立のために精度向上を図りたい。

参考文献

- 李玲珠：福祉分野におけるセオリー評価の活用可能性ープログラムの改善に資する情報を得るにはー，同志社大学社会学会，評論・社会科学 = Social science review (118)，pp1-12，2016。
- 佐藤哲郎：社会福祉協議会が展開するボランティアセンターの評価方法についてープログラム評価によるロジック・モデルの活用ー，学校法人松商学園松本大学，松本大学研究紀要 10，pp105-118，2012。